

# 国史跡末松廃寺跡発掘調査現地説明会資料

令和5年11月4日(土)

## 1 調査の概要

- 調査期間：8月から11月
- 原因：国史跡末松廃寺跡の再整備事業
- 目的：金堂北西隅の調査

末松廃寺跡の再整備に伴う発掘調査は平成26年度から実施しており、調査については有識者によって構成される野々市市遺跡調査指導委員会の指導の下で行われています。令和元年度から令和5年度にかけては寺院の中核となる建物である金堂こんどうの発掘調査を行っており、今年度は金堂の北西部の調査を実施しています。

昭和41・42年に実施された発掘調査成果によると、金堂は7世紀後半に建立された建物と、その後廃絶されたのちに再建された建物の2時期存在すると考えられています。令和4年度は創建当初の金堂の確認及び再建された金堂に伴うと考えられてきた、石が一面に敷き詰められた「玉石敷き」について、詳細に調べました。

## 2 令和5年度の発掘調査成果

- 「玉石敷き」の北西隅を確認しました。

令和4年度の発掘調査の結果、「玉石敷き」が「掘込地業ほりこみじぎょう」と呼ばれる古代寺院等の建築に用いられる地盤改良工事の痕跡の一部であることが明らかになりました。掘込地業は建物基礎を強固にするために行う、地面を掘り下げたのちに粘土や砂、礫などを突き固めながら埋め戻す地盤改良工事で、屋根に瓦を葺くなど重い建物を建てる際に多く用いられます。

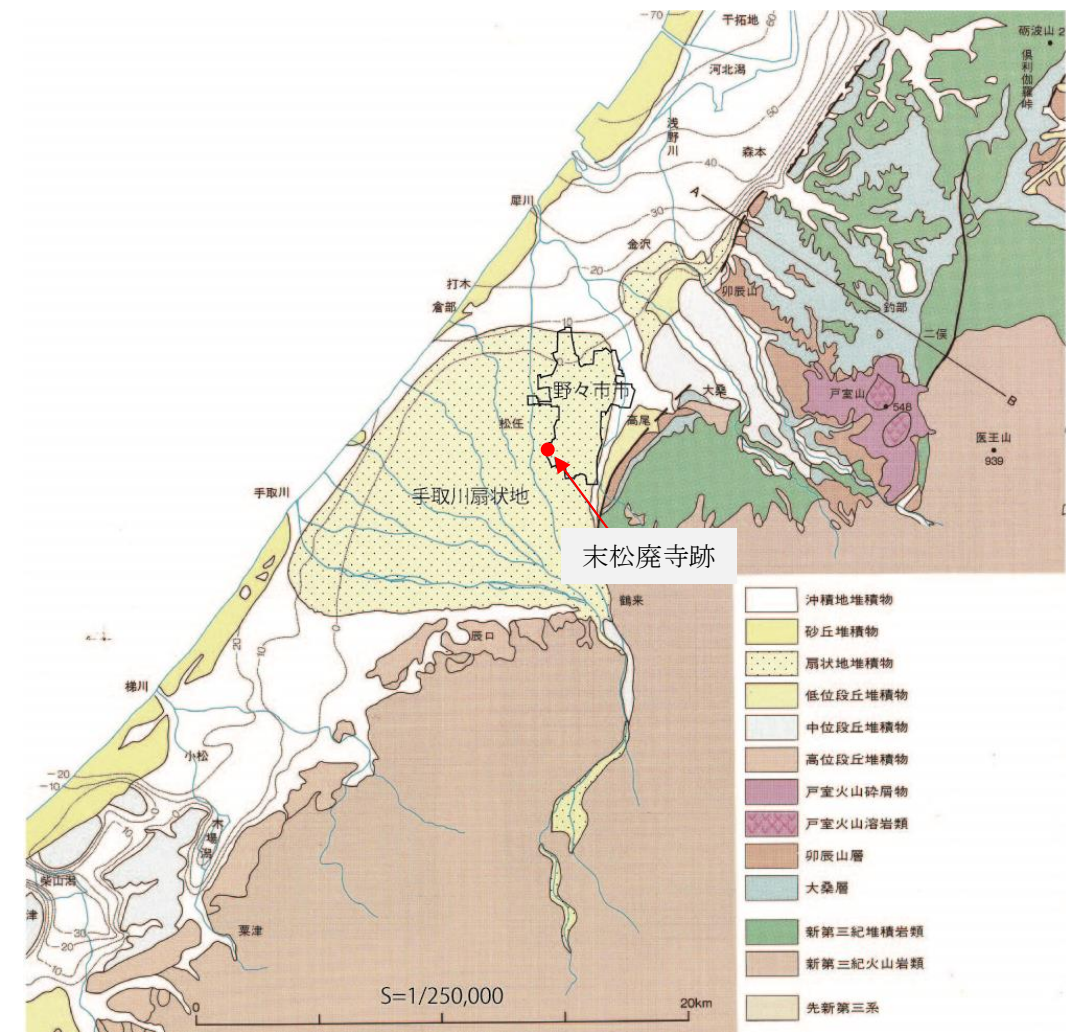
令和5年度調査でこれまで未調査であった「玉石敷き」の北西隅を確認できたことで、石が敷き詰められていた範囲が明らかになりました。末松廃寺跡で見つかった掘込地業は東西約15m、南北約12mの範囲で、その内一回り小さい範囲(東西約13m、南北約10m)に石が敷き詰められています。

この石は、いずれも河川によって流され角が丸くなった河原石と考えられます。末松廃寺跡を含む野々市市は手取川扇状地上に立地しており、地中深くには手取川によって白山から運ばれた大量の土や石が埋まっています。この掘込地業は、大きな石が身近にあり集めやすかった古代の人々が、建物を強固にするために創意工夫した痕跡と想像できます。

- 金堂を取り囲む溝を確認しました

金堂を取り囲む溝は、昭和41・42年の発掘調査で見つかった範囲を再調査し、溝内部に埋まった土の堆積状況を観察しました。金堂を取り囲む溝の性格としては「土を採るための溝」や「雨水排水用の溝」などが考えられ、金堂を造営する時期から廃絶する過程の中で設けられたものと考えられます。

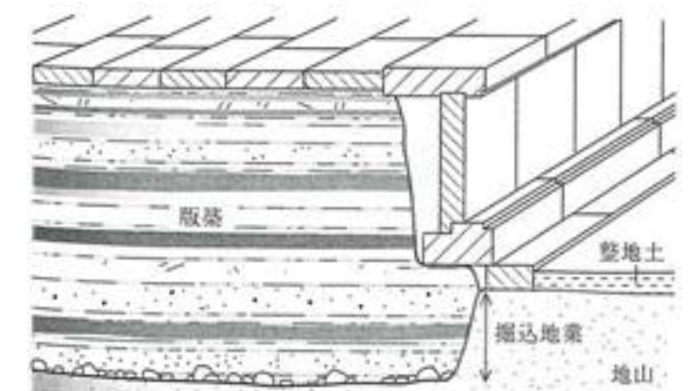
今後は令和元年度から実施した調査成果を整理し、末松廃寺跡の金堂が建てられた経過や建物の構造等について検討を進めていきます。



末松廃寺跡の立地  
(紺野義夫編 1993 『石川県地質図』を基に作成)



発掘調査の様子



掘込地業のイメージ図  
(文化庁編『発掘調査のてびき各種遺跡調査編』より引用)

